九州歯科大学における大学理念の周知度および大学教育満足度に関するアンケート調査—学生・卒業生・雇用主・教員での比較

豊 野 孝^{1,7} ・ 高 田 豊^{2,7} ・ 荒 井 秋 晴^{3,7}
稲 永 清 敏^{4,7} ・ 後 藤 哲 哉^{5,7} ・ 西 原 達 次^{6,7}

¹九州歯科大学健康促進科学専攻生命科学講座口腔組織機能解析学分野

²九州歯科大学健康促進科学専攻健康増進学講座総合内科学分野

³九州歯科大学口腔機能科学専攻医療人間形成学講座総合教育学分野

⁴九州歯科大学健康促進科学専攻生命科学講座生理学分野

⁵九州歯科大学健康促進科学専攻生命科学講座頭頸部構造解析学分野

⁶九州歯科大学健康促進科学専攻健康増進学講座感染分子生物学分野

⁷九州歯科大学自己評価部会

平成 20 年 6 月 16 日受付

平成 20 年 7 月 23 日受理

A Questionnaire Investigating Awareness of the University's of Philosophy and the Satisfaction with Education among Kyushu Dental College Students

Takashi Toyono¹, Yutaka Takata², Shusei Arai³,
Kiyotoshi Inenaga⁴, Tetsuya Goto⁵ and Tatsuji Nishihara⁶

¹Division of Oral Histology and Neurobiology, Department of Biosciences,

²Division of General Internal Medicine, Department of Health Promotion,
Science of Health Improvement,

³Division of General Education, Department of Clinical Communication and Practice,
Science of Oral Functions,

⁴Division of Physiology, Department of Biosciences,

⁵Division of Anatomy, Department of Biosciences,

⁶Division of Infections and Molecular Biology, Department of Biosciences,
Science of Health Improvement,

Kyushu Dental College, Kitakyushu, Japan

E-mail: toyono@kyu-dent.ac.jp

Abstract

Investigations of the communication of the university's philosophy and the satisfaction with education among those at Kyushu Dental College have not been conducted. In this study, we used mark-sheet questionnaires with 2nd through 6th year dental students, graduate

students, graduated students, employers of graduated students and faculty members of Kyushu Dental College.

The survey concerning awareness of the university's philosophy among the dental students, graduate students, graduated students and faculty members showed that awareness levels among faculty members were higher than those for the others. In contrast, the awareness levels of the university's philosophy for graduated students were lower than those for the others. The awareness levels for 2nd to 5th year students showed that the awareness levels for 2nd year students were higher than those for the others.

Next, the satisfaction with education survey for the dental students, graduate students, graduated students and employers of graduated students showed that the satisfaction levels with education among dental students were higher than those for the others. In contrast, the satisfaction levels with education among graduated students were lower than those for the others. Single regression analysis showed a significant and positive relation between the awareness of university philosophy and the satisfaction with education among the graduate students. A significant but weak positive relation was found between the awareness levels of university philosophy and the satisfaction levels with education among the dental students and graduated students.

It was concluded that the awareness levels of the university's philosophy and the satisfaction levels with education showed differences among various groups. Raising awareness of university philosophy and improving educational content and methods may elevate the satisfaction levels of dental students at Kyushu Dental College.

Key words: Awareness of university philosophy/Education/Satisfaction/Student/Employer

抄 録

大学における教育は大学の基本理念に基づいて行われており、学生および教員を含めた大学全体での大学理念の周知が必要である。さらに、大学での教育成果およびその教育成果が社会のニーズに込えているかを検証するためには、学内外の多面的な視点から検証を行う必要があると考えられる。そこで、本研究では歯学部学生（2～6年生）、大学院生、卒業生および教員および本学卒業生の雇用主を対象として大学理念の周知度および大学教育の満足度のマークシート方式によるアンケート調査を行った。

大学理念の周知度に関しては、教員の周知度が最も高く、卒業生が最も低いことが明らかになった。歯学部学生の各学年での周知度では、2年生が最も周知度が高かった。次に大学教育の満足度に関しては、歯学部学生の満足度が最も高く、卒業生が最も低いことが明らかになった。大学理念の周知度および大学教育の満足度の関係を単回帰分析で調べたところ、歯学部学生および卒業生は弱い正の関係が、大学院生は高い正の関係が認められた。

これらの結果より、大学理念の周知度および大学教育の満足度において対象群において差が認められた。今後は歯学部学生における本学理念の周知の徹底を図ると同時に、大学教育の満足度が向上するように本学での教育内容および方法の改善に取り組む必要があると考えられた。

キーワード: 大学理念/教育/満足度/学生/雇用主

緒 言

大学における教育は大学の基本理念に基づいて行われている。その基本理念は、各大学の建学理念および役割に基づいて制定されている^{1,2)}。九州歯科大学の基本理念は、「高度な専門性を持った歯科医師の育成」「地域医療の中核的役割を果たす」「歯科医学を支える研究の推進」を謳っており、これらの基本理念に基づいて本学での教育が行われている。しかしながら、本学学生がこれらの理念をきちんと意識しながら教育を受けているかは、これまで基本理念の周知度に関する調査が行われていないことから不明であった。そこで、本研究では歯学部学生、大学院生、卒業生および教員を対象として基本理念の周知度をアンケート調査により調べた。

大学の基本理念に基づいた教育の成果を向上させるためには、教育実態の把握と教育成果の検証が不可欠である。本学ではその為に、各教科に対する達成度および満足度調査、学習環境の満足度調査および、大学院生の教育・研究に関する意識および実態調査などを行ってきた³⁻⁶⁾。このように、これまでは主に学内の学生を対象として検証を行ってきたが、本学での教育成果およびその教育成果が社会のニーズに応えているかを検証するためには、学内外の多面的な視点から検証を行う必要があると考えられた。そこで、本研究では本学での教育成果の検証の一環として、歯学部学生、大学院生、卒業生お

び教員のみならず本学卒業生の雇用主を対象として教育満足度の検証を行った。

対象および方法

本調査は九州歯科大学歯学部学生および大学院生の以下の全学生（歯学部学生2年生（97名）、3年生（95名）、4年生（91名）、5年生（96名）、6年生（110名）、大学院生2年生（6名）、3年生（20名）、4年生（19名））および全教員（120名）を対象とした。卒業生に関しては、職場環境への順応期間などを考慮し、順応途中と考えられる卒業後1年目と、順応していると考えられる卒業5年目を対象とした。1年目および5年目卒業生の中から、今回のアンケートを行うにあたって連絡先が明らかになった170名全員を対象とした。卒業生の雇用主に関しては、卒業生の全雇用者の中から連絡先が明らかになった51名全員を対象とした。本調査はマークシート形式による、無記名によるアンケート調査により4月に行った。本学理念の周知度に対する回答を5から1の5段階評価（5大変よく知っている、4かなり知っている、3まあまあ知っている、2あまり知らない、1全く知らない）で設定し（表1）、5段階評価のそれぞれの割合（%）を算出した。さらに周知度5と4を高周知度群、1と2を低周知度群として、各対象の比較を行った。次に各対象の、周知度の得点数（平均±標準偏差）を算出した。各対象の周知度の有意差検定には、Kruskal-

表1 大学理念および教育満足度についてのアンケート項目

設問番号	アンケート内容	選 択 肢				
		大変よく 知っている	かなり 知っている	まあまあ 知っている	あまり 知らない	全く 知らない
1	本学の理念として「高度な専門性を持った歯科医師の育成」をうたっています。この理念を知っていますか。	5	4	3	2	1
2	本学の理念として「地域医療の中核的役割を果たす」をうたっています。この理念を知っていますか。	5	4	3	2	1
3	本学の理念として「歯科医学を支える研究の推進」をうたっています。この理念を知っていますか。	5	4	3	2	1
		高い → 低い				
4	あなたが本学で受けた教育の満足度を5段階で評価してください。	5	4	3	2	1

Wallis 検定を用いた。教員について年齢および勤務年数と、理念の周知度の関係を調べた。

本学での教育の満足度に対する回答を 5 から 1 の 5 段階評価（5 が最高で、1 が最低）で設定し（表 1）、5 段階評価のそれぞれの割合（%）を算出した。さらに満足度 5 と 4 を満足群、1 と 2 を不満足群として、各対象の比較を行った。次に各対象の、教育満足度の得点数（平均±標準偏差）を算出した。各対象の教育満足度の有意差検定には、Kruskal-Wallis 検定を用いた。

さらに大学理念の周知度および満足度間の関係について単回帰分析で Spearman 順位相関係数（ r ）を算出した。これらの統計分析は JMP Version 6.0（SAS Institute Japan）で行った。

結 果

I. 対象者

歯学部学生の全対象者 489 名中 412 名からアンケートを回収した。アンケート回収率は 84.3 %であった。大学院生の全対象者 45 名中 34 名からアンケートを回収した。アンケート回収率は 76 %であった。卒業生の全対象者 170 名中 101 名からアンケートを回収した。アンケート回収率は 59 %であった。教員の全対象 120 名中 98 名からアンケートを回収した。アンケート回収率は 82 %であった。卒業生の雇用主の全対象 51 名中 27 名からアンケートを回収した。アンケート回収率は 53 %であっ

た。全体での回収率は 76.8 %であった。

II. 大学理念の周知度 5 段階評価の割合と高周知度群と低周知度群割合の比較

各対象群の大学理念の周知度を図 1 に示す。高周知度群の割合が高い対象群の順番は教員（58 %）、大学院（24 %）、歯学部学生（16 %）、卒業生（11 %）の順であった。一方、低周知度群の割合が低い対象群の順番は教員（7 %）、大学院（34 %）、歯学部学生（41 %）、卒業生（49 %）の順であった。このように、教員においては各対象群の中で最も高周知度群の割合が高値であり、低周知度群の割合が低値であった。

歯学部学生に関して、学年間での周知度の関係を調べた（図 2）。高周知度群の割合が高い学年の順番は 2 年生（24 %）、4 年生（20 %）、6 年生（13 %）、3 年生（11 %）、5 年生（10 %）の順であった。一方、低周知度群の割合が低い学年の順番は 2 年生（30 %）、4 年生（42 %）、3 年生、5 年生、6 年生（それぞれ 44 %）の順であった。

次に教員に関して、その年齢および勤務年数と理念の周知度の関係を調べた（図 3）。教員年齢 39 才以下では高周知度群が 32 %で、低周知度群が 12 %であった。教員年齢 40 ～ 49 才では高周知度群が 72 %で、低周知度群が 3 %であった。教員年齢 50 才以上では高周知度群が 71 %で、低周知度群が 6 %であった。このように教員においては、教員年齢が 39 才以下では 40 才以上と比較して、高周知度群が少なく、低周知度群が多い傾向がみ

図 1 大学理念の周知度。

図2 歯学部学生の大学理念の周知度。

図3 教員の理念周知度。

られた。一方勤務年数では勤務年数4年以下では高周知度群が39%で、低周知度群が15%であった。勤務年数5～9年では高周知度群が50%で、低周知度群が5%であった。勤務年数10年以上では高周知度群が69%で、低周知度群が4%であった。このように勤務年数の

増加につれ、高周知度群が増加し、低周知度群が減少する傾向がみられた。

Ⅲ. 大学理念の周知度の対象群間差

大学理念の周知度について、対象群間で異なるかどうかを調べた(表2)。その結果、大学理念の周知度におい

て有意の対象群間の差を認めた。大学理念の周知度については歯学部学生，卒業生，大学院生（2.56～2.87）とあまり差は認められなかったが，教員においては3.81と高値であった。次に，歯学部学生に関して，周知度が学年間で異なるかどうかを調べた（表3）。その結果，大学理念の周知度において有意の学年間の差を認めた。大学理念の周知度については3年生，4年生，5年生，6年生（2.61～2.75）においてあまり差は認められなかったが，2年生においては3.03と高値であった。

IV. 満足度5段階評価の割合と満足者と不満足者割合の比較

各対象群の大学教育への満足度を調べた（図4）。満足群（満足度4と5）の割合が高い順番は歯学部学生（43%），大学院生，雇用主（それぞれ38%），卒業生（18%）の順であった。一方，不満足群（満足度1と2）の割合が低い対象群の順番は歯学部学生（10%），卒業生（17%），大学院生（18%），雇用主（31%）の順であった。

歯学部学生に関して，学年間での満足度の関係を調べ

表2 大学理念の周知度点数

内容	歯学部学生	卒業生	大学院生	教員	Kruskal Wallis 検定（P値）
周知度	2.73±1.01	2.56±0.91	2.87±0.90	3.81±1.00	0.000

表3 歯学部学生の大学理念の周知度点数

内容	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	Kruskal Wallis 検定（P値）
周知度	3.03±1.06	2.62±0.96	2.75±1.09	2.62±0.91	2.61±0.94	0.000

図4 大学教育への満足度。

図5 歯学部学生の大学教育への満足度。

た(図5), 満足群の割合が高い学年の順番は3年生(56%), 4年生(47%), 5年生(39%), 2年生(38%), 6年生(36%)の順であった。一方, 不満足群の割合が低い学年の順番は3年生(5%), 4年生, 5年生(それぞれ8%), 6年生(14%), 2年生(17%)の順であった。

V. 満足度の対象群間差

大学教育への満足度について, 各対象群で異なるかどうかを調べた(表4)。その結果, 大学教育への満足度については歯学部学生が3.37で最も高値で, 卒業生が3.03と最も低値であった。次に歯学部学生に関して, 大学教

育への満足度が学年間で異なるかどうかを調べた(表5)。その結果, 満足度については2年生, 5年生, 6年生(3.23~3.34)とあまり差は認められなかったが, 3年生および4年生においてはそれぞれ3.55および3.51と高値であった。

VI. 大学理念の周知度および大学教育への満足度の関係

大学理念の周知度および大学教育の満足度の関係を単回帰分析で調べた。単回帰分析ではSpearman順位相関係数(r)と有意確率(両側) p 値を算出した(表6)。 p 値は全て0.000で, 単回帰分析では大学理念の周知度および大学教育の満足度の間に有意の正の関係が認めら

表4 大学教育の満足度点数

内容	歯学部学生	卒業生	大学院生	雇用主	Kruskal Wallis 検定(P値)
満足度	3.37±0.77	3.03±0.71	3.18±0.80	3.12±0.91	0.0001

表5 歯学部学生の大学教育の満足度点数

内容	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	Kruskal Wallis 検定(P値)
満足度	3.24±0.89	3.55±0.72	3.51±0.81	3.34±0.65	3.23±0.73	0.0271

表6 大学理念の周知度および大学教育の満足度の関係の単回帰分析

対象群	相関係数（ r ）	P 値
歯学部学生	0.260	0.000
卒業生	0.286	0.000
大学院生	0.522	0.000

れた。相関係数値からみると、歯学部学生および卒業生においては周知度と満足度は弱い正の関係で、大学院生においては周知度と満足度は高い正の関係であった。

考 察

今回のアンケート調査から本学における大学理念の周知度に関して、これらの得点数の平均値の比較を行った。その結果、教員の周知度が最も高く、卒業生の周知度が最も低いことが明らかになった。歯学部学生においては2年生が他の学年と比較して、周知度の平均点が最も高かった。歯学部学生は志望大学を選ぶ際に、本学の大学理念を周知していると考えられる。したがって、2年生は入学してからの、在学年数、すなわち入学後の経過年数が他の学年と比較して短いためにこのように周知度が高いことが推測された。卒業生において周知度が最も低い原因としては、在学期間中の大学理念の周知不足が推察された。

教員と比較して、歯学部学生および大学院生は約1ポイントの周知度点数の開きがあることが明らかになった。大学教育の前提として、教員および学生を含めた大学全体での基本理念の周知の徹底が必要だと考えられる。そこで今後は歯学部学生および大学院生の大学理念の周知度の向上に努めなければならないと考えられた。歯学部学生および大学院生の大学理念の周知度が向上すれば、卒業生における理念の周知度が向上することも期待される。

大学教育の満足度については歯学部学生が最も高く、卒業生が最も低かった。これは実際の臨床の現場で働いている卒業生にとって、大学で受けた教育が、臨床の現場では満足出来ていないことを示していると考えられる。そこで今後は卒業生の大学教育の不満点を調べ、その点に関して大学教育の改善を図っていく必要があると考えられる。卒業生の教育満足度が最も低値であることから、卒業生の雇用主も大学教育の満足度が低いことが予想された。しかしながら、実際は大学院生と同程度の

満足度で、卒業生ほど低値ではなかった。このことは、各雇用主にとって、卒業生に対する期待にバラツキがあると考えられるが、本学卒業生が受けた教育は、ある程度満足出来る傾向にあると考えられる。一方、雇用主においては他の対象群と比較し不満足群の割合が最も高かった。したがって、今後は雇用主の大学教育への不満点を調べ、その点に関して大学教育の改善を図り、雇用主の大学教育に対する満足度を上昇させる必要があると考えられる。大学が社会へ貢献するためには、実際の社会からのニーズを知り、それに応えることが重要であると考えられる。社会からのニーズには、患者からのニーズや、雇用主からのニーズなど様々なニーズがある。これらのニーズの一つとして、雇用主から期待される歯科医師を育成することがあると考えられる。本学がこのニーズに応えることで社会に貢献することは、同時に本学卒業生の就職支援にもつながると考えられる。

歯学部学生の教育満足度は、各学年の中で3年生の満足群の割合が最も高く、4年生から6年生になるにしたがって、その割合が減少していることが認められた。本アンケートは4月に実施しているので、歯学部学生の教育満足度は1学年前の学年までに受けた教育の満足度を示している。2年生の講義および実習は1年生と比べ教養科目の割合が減少し、歯科に関連した基礎科目の割合が増加する、さらに3年生以降は講義および実習における臨床科目の割合が増加する⁹⁾。したがって3年生において教育満足度が他の学年に比べ高いのは、歯科に関連した基礎科目などを2年生から受講し歯科に対しての興味が高まるためだと推測される。4年生から6年生になるにしたがって、臨床と関連した講義および実習の割合が増加することから、満足度が上昇することが予想された。しかしながら、満足群の割合の減少が認められたことから、今後はどのような理由により満足度が減少しているかを検証していく必要があると考えられる。

大学教育の満足度に関わるファクターとしては、大学での講義および実習の他にも、それに関わる教員や、大学施設などが挙げられる。これまでに我々は大学教育の満足度および大学施設の満足度が関係していることを報告している⁹⁾。今後は本学においてどのファクターが大学教育の満足度に強く関わっているかを調べていく必要があると考えられる。さらに上記ファクター以外のファクターも大学教育の満足度に関わっている可能性も考えられるので、その点に関しても検索していく必要があると考えられる。

本研究により歯学部学生の満足度は高く、卒業生の満

足度が低い事が明らかになり、学内の歯学部学生の評価と、学外の卒業生の評価が異なる結果が得られた。大学教育の成果を評価するには、学内での調査に加えて卒業生および雇用主などの学外からの評価も必要かつ重要である事が本研究により示されたと考えられる。

これらの結果より、本学理念の周知度に歯学部学生および教員において差が認められたことから、今後は本学での教育を行う上での前提として歯学部学生における本学理念の周知の徹底を図る必要がある。さらに卒業生および卒業生の雇用主における本学教育の不満足な点を検証するとともに、その点の改善に取り組む必要があると考えられた。

結 論

大学理念の周知度に関して、歯学部学生、大学院生、卒業生および教員間で比較したところ、教員の周知度が最も高く、卒業生が最も低いことが明らかになった。歯学部学生の各学年での周知度は、2年生の周知度が最も高かった。次に大学教育の満足度に関して、歯学部学生、大学院生、卒業生の雇用主および卒業生間で比較を行った。その結果、歯学部学生の満足度が最も高く、卒業生が最も低いことが明らかになった。大学理念の周知度および大学教育の満足度の関係を単回帰分析で調べたところ、歯学部学生および卒業生においては弱い正の関係が、大学院生においては高い正の関係が認められた。

これらの結果より、本学理念の周知度に歯学部学生および教員において差が認められたことから、今後は歯学部学生における本学理念の周知の徹底を図る必要がある。大学教育の満足度に関して、卒業生が最も低かったことから今後は、卒業生および卒業生の雇用主における

本学教育の不満足な点を検証するとともに、その点の改善に取り組む必要があると考えられた。

謝 辞

本研究を行うにあたり御助言をいただきました九州歯科大学総合教育学の平川要教授、中原孝洋先生に深く感謝申し上げます。さらにこの研究の実施運営に多大な御支援をいただきました本学学務部長の神園勝義様、教務企画班長の麻川和久様、教務企画班の堀川小百合様、松尾秀治様、明石伸治様、総務班の佐野啓二様、学生支援班の宮崎隆博様、安藤佳子様の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 大西健夫, 佐藤能丸: 私立大学の源流「志」と「資」の大学理念. 学文社, 東京, 2006, 1-16.
- 2) 赤岡 巧: 京都大学の基本理念について. 京大広報 564: 1181-1184, 2002.
- 3) 後藤哲哉, 小林 繁, 本田栄子, 船越啓右, 天野仁一朗, 河岸重則, 吉野賢一, 村田貴俊, 井上博雅, 辻澤利行他: 学生の基礎歯科学志向に対する基礎配属(研究室配属)の効果について. 日歯教誌 20: 396-404, 2005.
- 4) 稲永清敏, 高田 豊, 豊野 孝, 荒井秋晴, 後藤哲哉, 西原達次: 九州歯科大学大学院生の教育・研究に関する意識および実態調査. 九州歯会誌 62: 48-56, 2008.
- 5) 豊野 孝, 高田 豊, 荒井秋晴, 稲永清敏, 後藤哲哉, 西原達次: 九州歯科大学歯学部学生の講義および実習の達成度および満足度に関するアンケート調査. 日歯教誌 23: 341-349, 2007.
- 6) 高田 豊, 豊野 孝, 荒井秋晴, 稲永清敏, 後藤哲哉, 西原達次: 九州歯科大学歯学部学生の学習環境満足度調査結果について. 日歯教誌 24: 25-32, 2008.